

## 自由に選べるからこそ

2021年11月24日

大学宗教センター長 栗原 健

### 聖書: マタイによる福音書 22章 34節～40節

<sup>34</sup> ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。<sup>35</sup> そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。<sup>36</sup> 「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」<sup>37</sup> イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』<sup>38</sup> これが最も重要な第一の掟である。<sup>39</sup> 第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』<sup>40</sup> 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

今年もあと1か月余りとなりました。気温も低くなり、いよいよ冬を迎えます。この時期に心配になるのが、学生の心の状態です。毎年冬が近づくと、不安やストレスで授業を休む学生、課題に身が入らない学生が出て来て、採点や卒業判定などで困ることになります。

若者が悩むことは古今東西、自然なことですが、それにしても最近はその傾向が目立ちます。この背景には、どのような要因が働いているのでしょうか。私たちはどのように彼女たちをサポートできるのでしょうか。今日はこの点について、マタイ福音書にあるイエスの言葉を手がかりに考えてみましょう。

今日の聖書箇所は、私が毎年、キリスト教学の授業の初回で1年生に話すものです。ここで私は学生たちに、「このイエスの言葉には、実は3つのことが教えられているけれど、それに気がついた？」と尋ねます。皆さんは気づかれたでしょうか。

1つ目が「神を愛しなさい」で、次が「隣人(他者)を愛しなさい」ですね。しかし、もう1つのことがあります。

「隣人を自分のように愛しなさい」とあります。「自分のように」とある以上、「自分自身のことでも愛しなさい」と言われていることになります。

人を愛するとは、どのようなことでしょうか。いろいろな言い方がありますが、確かなことは、その人を大切な価値ある存在として受け入れて、本人も自分自身のことをそのように感じられるようサポートする、その人の居場所を作る手伝いをする、と言うことができます(参照: J・バニエ『心貧しき者の幸い』、あめんどう、41頁)。その場合、「自分を愛する」とは、自分自身のことをも大切な存在として受け入れて、自分に居場所を与えることだと言えますね。

聖書は、一人ひとりが、神に愛されるかけがえのない存在として創られたと教えて

いる。だから人と比べ合いをしたり、「他人の評価が自分の価値を決める」なんて思わなくてもいいんだよと、ここで私は学生に伝えています。

大抵の1年生は、この話を聞くとびっくりします。というのも若者は、信仰という人間を支配したり、紛争をひき起こす悪いものだと思っているか、きれいごとを並べた道徳律のように見ていることが多いからです。実は聖書は自分の悩みにもダイレクトに語りかけるものだという事は、学生にとって驚きとなります。

そこまではいいのですが、ここで問題が起きるのです。

少なからぬ学生が、「自分を愛する」ということに困難を覚えています。どうしても人と比べてしまい、「自分なんか」と思ってしまふ。時として「自分はいてもいなくても同じだ」と感じてしまふ。人の評価に左右されやすい。こうした悩みを話す学生は多いです。これらの不安が、彼女たちを悩ますストレスの根底にあるように見受けられます。

もちろん、多感な青年時代にあつては、他者と自分を比較して悩むことは普通です。「自分は、なりたい自分の姿になっていない」と思い、理想と現実のギャップに悩む。自分の弱さに苦しむ。これは私たちも体験したことですし、そうすることが心の成長になって来ました。しかし、今の若者たちの悩みはそれとは別のようです。成長に結びつくものではない、もっと根本的な不安があるようです。

私は心理学の専門家ではありませんが、ヒントとなることは考えられます。それを見てみましょう。

現代社会の特徴は、自由と多様性です。「どのように生きてても良い。人生を好きに選んでよい。個性を持って生きなさい」若者たちはそのように言われて生きています。自由と多様性、個性。これらは無論、人間が人間らしく生きるために必要なことです。しかし、まだ自己が確立されていない若者にとっては、扱い慣れないものかも知れません。

自由に選べるということは、自分の選択に対して責任を持つことになります。失敗すれば、それは自分の責任です。そうすると、「果たして自分の選択は正しいのか」といつも気になる、ということが起き得ます。

さらに、「あなたらしく生きなさい。個性が大事です」ということも、この日本社会では、果たして本気で語られているのでしょうか。

現実の社会が言っていることは、「どんなあなたでもいいんだよ。あなたの姿があなたのスタイルだよ」ということではなくて、「みんな同じぐらいに、人に迷惑をかけない程度でほどほどに個性を持ちなさいよ。人にその個性をアピールできる、生産的ないい子になりなさいよ」ということではないでしょうか。当然ですが、これは本当の意味での個性や多様性とは違います。

つまり、自由に生きなさいと言われるけれども、実際には自由ではない。個性が求められるけど、人からチェックされる。しかしその結果については、責任を取らされる。矛盾し合う要求を同時に課せられている状態です。「そこを折り合いつけるのが、大人になることでしょ」と言われそうですが、自分自身を作っている最中の子どもや若者

には、大変な重荷ではないでしょうか。

このことについて社会学者の土井隆義さんは、いきなり個性や多様性を求められるようになった現代の子どもたちは、頼れる画一的な尺度が無くなったため、その場で周りの人に承認を求めるしかなくなったと指摘しています(参照:土井隆義『キャラ化する/される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』、岩波書店、14-15頁)。

自分がこれでよいのか、周りの承認によって確認するしかない。当然、人の評価に左右されることになるし、承認してもらうために空気を読みキャラクターを演じる、それを自分の個性であるかのように見せる、ということも出て来ます。SNS がそれに拍車をかけています。

若者が人の評価を過度に意識する、承認欲求が強く失敗を恐れるのも、こうした背景があるためでしょう。これでは、自己肯定感が低くなるのも自然ななりゆきです。しかも、大学ではこれまでになく多くの人に出会うので、簡単に承認を得ることが難しくなります。不安やストレスが高まるわけです。

このストレスが一気に倍増するのが、就職活動でしょう。自分の将来を自分で選ばなくてはいけない。他人向けに造って来たキャラクターでは、もうもたない。じゃあ自分は何をしたいのかというと、深く考えるほど分からなくなって来る。それでも、社会の厳しさについて日々聞いているので、「絶対に選択を間違えてはいけない」と思う。その結果思いつめてしまい、身動きができなくなる人が出て来ても不思議ではありません。

以上見て来たことは非常に類型化した話ですので、もちろん全ての学生にあてはまることではありません。こうした葛藤をおぼえずに生きている人も多いと思います。しかし、これらのことで悩んでいる若者も少なくないはず。それは決して「メンタルが弱い」ということで片づけられるものではなく、もっと大きな社会的な要因が背景にある。ここまでやって来られただけでも、彼女たちは大したものかも知れない。そう考えるべきかも知れません。

私たちは、こうした重荷を背負って来た若者をどのようにサポートするべきなのでしょう。実はここにこそ、キリスト教主義の学校である本学院の存在意義があると思います。

彼女たちは、いわば嵐の中をずぶ濡れになりながら、ここまでやっとの思いでたどり着いた旅人かも知れないのです。その彼女たちに、「ここでは、重荷を下ろしていいんだよ」と伝える。別にキャラを演じる必要はないよ、あなたはあなたであるだけで、大きな価値があり、大切な存在なのだ。そのことを伝えるのがキリスト教学校ではないでしょうか。

平良愛香さんという、沖縄出身の日本基督教団牧師がおられます。日本ではまだ珍しい同性愛者の牧師として大きな活躍をされている方です(立教大学などでも授業を持たれています)。この平良牧師は、落ち込んでいる時、心が苦しい時には、「私が私を愛せなくても、私を愛してくれる存在がいる」ことを思い出す、と述べていま

す(平良愛香『あなたが気づかないだけで神様もゲイもいつもあなたのそばにいる』、学研、267頁)。

「私が私を愛せなくても、私を愛してくれる存在がいる」。それが、神に創られた人間として最大の恵みだというのですね。自分自身を受け入れることが難しく、人に評価されて生きて来た若者にとって、このことを知ることは大きな意味があります。そうしたことを誰かに言われたというだけでも、人生に違いが出るからです。

さらに聖書は、人は1人で生きて行くものではない、助け合って他者とのつながりの中で生きて行くものなのだ、と示しています。このことも若者には大切なことです。「ずっと自分を守るだけで精一杯だった」という人が、少なくありません。その結果、他者とのつながりを感じることなく、生きているという実感を持ってない人が、最近増えているように思えます。

そうした中でも、他者のために行動すること、誰かに「ありがとう」と言われたことによって人とのつながりを見出せた、自分の道が見つかったという人も、数多くいます。「自分は人を幸せにすることができる。生きる意味があるのだ」ということは、革命的な発見になります。そのような機会を提供して行くことも、キリスト教主義の学校の大切な使命です。

身動きできなくなってしまった学生に対処するのは大変ですが、実は彼女たちは、この社会が抱える問題について、私たちに重要なことを伝えてくれるメッセンジャーかも知れません。彼女たちを傷ついた旅人として迎える。まるで昔の修道院のようですが、そのような場所であれば、まさに現代社会においてかけがえのない使命を持つ学校として、本学院は立つことができると思います。それが、建学の精神を今の時代に具現するものであると信じます。そうした使命を果たして行くことができますよう、努めて行きましょう。